

フエニックス・モザイク

東洋学園大学

小原 芳和 ● 東洋学園大学企画開発本部事務部長

JR中央線の水道橋駅から白山通りを北に歩くと、二、三分で茗岐坂下の交差点となる。交差点の左側は東京ドーム、遊園地、高層ホテル等が建ち並び、右側は対照的に閑静なビル街となっている。そして、右側の緩やかな上り坂の中ほどに、鮮やかな色彩の巨大な壁画が目に入る。それがフエニックス・モザイク「岩間がくれの蓮花」である。壁画のデザイン・制作指導を行ったのは、建築家で日本芸術院会員の今井兼次氏（一九五〇～一九八七）である。今井兼次氏には、このほか長崎の日本二十六聖人殉教記念館、安曇野の萩原礫山美術館、皇居の桃華楽堂等の作品があり、スペインの建築家アントニオ・ガウディを日本に紹介したことも知られている。

東洋学園大学は平成四（一九九二）年開設の大学で、人文学部に「国際コミュニケーション学科」と「人間科学科」、現代経営学部に「現代経営学科」の二学部三学科があり、両

A violet by a mossy stone

Half hidden from the eye!

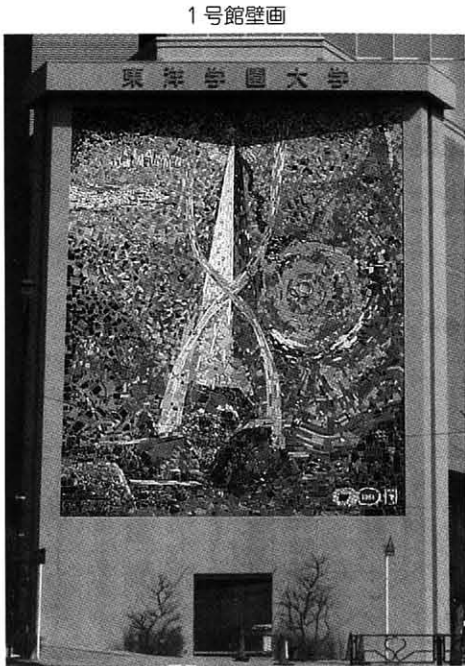
— Fair as a star, when only one

Is shining in the sky.

（こけむした岩角に、人目を避けて咲く蓮の花

—ただ一つ夜空に光る星のような美しさ）

シンボルは学園にかかわるすべての人の思いを結集したものにしたいという本学の希望と、今井兼次氏の「小さな粗末な素材でもそれが数多く集まれば大きな生命力になる」という考えが一致し、壁画の素材にはタイルのほかに学生、卒業



1号館壁画

学部ともに一、二年次は自然豊かな流山キャンパス（千葉県）、三、四年次は都心の本郷キャンパスで学んでいる。平成二十（二〇〇八）年には、大学院「現代経営研究科」が開設された。学園は大正十五（一九二六）年に創立された東洋女子歯科医学専門学校を出発点としており、八十年を超える歴史を有している。同校は女子初の文部大臣指定校として、数多くの女性歯科医を社会に送り出した。しかし、昭和二十（一九四五）年に第二次世界大戦の空襲により施設を失い、昭和二十五（一九五〇）年に最後の卒業生を送り出すこととなった。

同年、英語の時代の到来に対応すべく「英語英文科」を中心とする東洋女子短期大学が誕生した。同校は徐々に発展を遂げ、開設十周年の昭和三十六（一九六一）年に新校舎を建設した。壁画はその際に学園のシンボルとして制作されたものである。

フエニックスは、永遠の時を生きるという伝説上の鳥で、不死鳥、火の鳥とも言われ、世界各地に伝承がある。フエニックス・モザイクというタイトルは、永遠の命をフエニックスのイメージに重ねたものであり、作品の右下には完成した年の干支である「牛」と「一九六一」の数字が∞の記号で囲まれている。「岩間がくれの蓮花」という題は、イギリスの詩人W・ワーズワースの「ルーシー詩篇」の次の一節からとられたものである。

生、教職員の持ち寄った陶器の破片も用いられている。

作品は上部に輝く星、右に永久性を象徴する太陽を配し、交錯した二本の線が画面全体に緊張感を与えている。戦災から復興途上の女子短期大学の姿を、蓮や星に仮託している。

その後、東洋女子短期大学は、女子教育の向上に尽くしつつ時代の要請に沿って形を変えながら、約三万人に上る卒業生を世に送り出し、平成十九（二〇〇七）年にその伝統を東洋学園大学に引き継ぐこととなった。

平成十九（二〇〇七）年、東洋学園大学は建学八十周年記念事業の一環として、本郷キャンパスに新校舎を建設した。そして、屋上庭園、体育館、部室、図書館、多目的ホール、学生ラウンジ等を備えた都市型キャンパスの壁面には、旧校舎の一部となっていたフエニックス・モザイク「岩間がくれの蓮花」の部分がそのまま残された。モザイクは半世紀を経たいまも鮮やかな色彩を失わず、この地域のシンボリックな存在となっている。平成二十（二〇〇八）年には文京区から「文の京都市景観賞」の「景観創造賞」に選定されている。フエニックスのように数々の苦難を乗り越え、つねに新しい生命を獲得しながら、時代を超えて発展することへの思いが、この壁画には託されている。東洋学園は制作者と校友、学園自身の思いが重なって完成したこの作品を、東洋学園大学のシンボルとして末永く継承していくこととしている。

※記事・写真等は社団法人日本私立大学連盟の許諾を得て転載しています。

著作権は社団法人私立大学連盟に帰属。記事・画像等の無断転載は一切お断りします。